

二月一四日(火)

久しぶりに娘がウチに来たかと思えば、可愛らしいお客さんを連れて来た。二階から上の自宅スペースではなく、一階のサロンスペースに作った応接セットへ座ってもらった。お客様用のお茶を入れながら、沙綾の話を聞く。

「へー。一輝くんの妹さん……」

沙綾の連れて来たお客さん、瑞希さんは少し緊張した面持ちで目の前のお茶を見つめている。沙綾に「遠慮しないで」と言われると、「いただきます」とグラスに口をつけた。

「立命館の学生さんで、映像の仕事をしたい、と」

「ええ、まあ……」

服の上からパツと見る限りでは、全身のバランスは悪くない。沙綾のようなメリハリのある体型ではないが、スレンダーで付くところには付いている十分に魅力的なスタイルをしている。背丈は一六〇cm未満、極度に痩せている印象もない。

今は肩に力が入っているけど、姿勢そのものは悪くないし、歩いている姿や立ち姿は程よく力が抜けていて、流れるような所作が身についている。一々派手な沙綾に、少しは爪の垢を煎じて飲ませたいくらいの好対照だ。

「出る方じゃなくて、撮る方をやりたいのね」

「お母さんもそう思う？ 演者をやらないのがもつたないと思わない？」

地味なくらいなのに、不思議と耳目を引く器量は、十分に映える逸材に思えるが、彼女自身から出るプレッシャー、役者っぽい気迫のようなものは感じられない。

「高校生ぐらいの時にも、そういう話はされたことがあります」

瑞希さんは、「『葬式の名人』って、ご存知ですか？」と言葉を継いだ。

「地震の後ぐらいに公開された、茨木オールロケっていう映画？」

彼女は頷き、撮影時の話を語り始める。

「エキストラについて声をかけてもらったんですけど、場当たりって言うか、テストの時に交代させられちゃって」

近い背格好の友人に出番を取られてしまった、と。

「何となく悔しくて、公開された映画を見にいったら、個人的にはイマイチピンとこなくって……」

瑞希さんの話が一旦途切れる。沙綾は全くピンとこない様子で、「それで、なんで撮る方をやりたくなつたの？」と瑞希さんに続きを促した。彼女はお茶で口を湿らせると、「茨木でも映画が撮れるんだって思ったら、なんか嬉しくなっちゃって」と言った。

「でも、映画は茨木らしさがあんまりなくって……。もつと茨木ならではの映画ってどうか、いい映画作れるはずだって悔しくもなっちゃって」

瑞希さんの話を聞いていた沙綾が、稀に見る真剣な表情で彼女を見ていた。

「で、映像作家の修行として、沙綾と一味違うYoutube動画をやりたい、と」

「沙綾さんがインフルエンサーとして活動する合間に、私たちの映像制作もやらせていただきたいんです」

瑞希さんは「よろしくお願いします」とテーブルに額を擦り付ける勢いで頭を下げた。

「沙綾はそれでいいの？」

沙綾の目はいつも以上に強い意思を湛えて、真っ直ぐ私を見つめてくる。瑞希さんに、頭を上げてもらうように伝えた。彼女は顔を上げ、「いいんですか？」と言った。私はそれに頷いた。

「あなたの地元愛、作家のプライド、気に入ったわ。ただし、学生だからって中途半端な作品は許さないから。私にも沙綾にも、紹介するお友達にも、失礼のない映像を作って頂戴」

「瑞希さんの顔がパツと華やいで、「ありがとうございます」と勢いよく頭を下げる。今度はテーブルに額をぶつけ、グラスに残っていた彼女のお茶が少しだけ周囲に溢れた。「大丈夫？」と笑いながら瑞希さんを手助けする沙綾に、私の中の何かがグツと揺さぶられた。